対象作品／高橋宏幸著『チロヌップのきつね』金の星社

親子のきずな

弘前市立文京小学校　鈴木優衣

〝チロヌップ〟って何だろうと思い、この本を開いてみました。〝チロヌップ〟とは、北の海にうかぶ小さな島のことです。その島にきつねの親子が住んでいて、はじめは幸せにくらしていたのに、きけんがせまり、これから先、親子はどうなるのか気になってこの本を読んでいきました。

この本を読んで、心にのこっていることが二つあります。

一つめは、父ぎつねのことです。島に兵隊がやってきて、母ぎつねと子ぎつねを守るために、父ぎつねが「ケーン」と鳴いて、わざと兵隊の方へ飛び出して行きました。父ぎつねが、自分の命をぎせいにしてまで家族を守って、すごいなあと思いました。

二つめは、母ぎつねのことです。わなにはまって動けない子ぎつねのために、風の日も雨の日もえものをさがし、自分のことよりも、子ぎつねに食べ物のすべてをあたえつづけたことです。さらに、冬がきて、動けない子ぎつねを毛布のようにつつんでずっとあたため続けたことです。母ぎつねもまた、自分よりも子ぎつねが大事だという思いに、心をうたれました。

わたしはこの本を読んで、〝親子のきずな〟について考えました。

わたしの場合、生まれつき耳が聞こえにくく、耳元でさけんでもらって、やっと聞き取れるくらいだったそうです。でも、今では友達がたくさんでき、小学校で毎日楽しくすごしています。

しかし、わたしが小さい時は、父と母はとてもなやんでいたということを聞きました。わたしのためにどうしたらいいか、なやんでなやんで、三才の時に人工内耳の手じゅつをしました。そして、ろう学校のようち部に入りました。毎日母がつきっきりで見守ってくれました。

また、家では今日あったできごとを家族とたくさんお話したり、絵にかいたりしました。字が書けるようになると、毎日絵日記を書きながらお話しました。

その両親のおかげで、わたしは言葉がおくれることなく人と話せるようになりました。おしゃべりが大好きで、「うるさい。」と言われるほどです。もちろん、絵や字をかくのも大好きです。

わたしの父も母も、『チロヌップのきつね』の父と母のように、わたしのために、たくさんなやみ、考え、いいと思ったことはどんどん実行してくれたんだ、わたしのことをとても大事に思ってくれているんだと、しみじみ感じました。

これからは、このきつねの家族のように、父や母や弟を、今よりももっと優しく、そして、大切にしていきたいと思いました。